

『豊饒の海』論

—— 本多繁邦を中心に ——

加 来 流 水

はじめに

長編小説『豊饒の海』は、『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』の四巻で構成されている。

第一巻『春の雪』の末尾の註において、作者自身が「『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語」と明言している。その言葉通り、各巻にはそれぞれ主人公といえる若者が登場するが、彼ら四人は「転生」によってつながっている。そして、この四人の主人公の「転生」を見届ける存在として、全話を通じて本多繁邦が登場するのである。

この作品の読者は、本多を通じて各話の主人公たちが「転生」によってつながっている（あるいはつながっているかもしれない）ことを知るようになっていく。主に本多の視点から語られている物語であると言え、その存在は単に狂言回しや副主人公といったことばで片づけられるもの

ではないと考えられる。

よって、本論ではこの本多繁邦に注目し、各話の主人公たちとの関わりを追いながら、この人物について一考してみたいと思う。

本論

一、本多繁邦と主人公たち^(註一)

『豊饒の海』全四巻は各巻ごとに主人公が変わっている。主人公たちのつながりを認識するのは本多繁邦であり、各巻の主人公と本多のあいだには「転生者（行動する者）」と認識者（見る者）^(註二)の関係が成立していると言える。この章では、まず本多繁邦と四人の主人公たちとの関わりを分析してみたい。

(一) 松枝清頭と本多繁邦

第一巻『春の雪』の主人公は松枝清頭である。『春の雪』はこの松枝清頭と彼の幼なじみである綾倉聡子の恋物語を

中心に展開してゆく。本多繁邦は、この巻では清頭のへもつとも親しい友だちとして登場する。

主人公の松枝清頭は、へめずらしいほどの美少年で、へ自分を愛してくれる人を軽んじ、軽んじるばかりか冷酷に扱ふ」という性格の持ち主である。この性格が聡子との恋愛の成就を妨げる発端ともなっており、本多との友情も、へもつとも親しい友だち」でありながら、本多自身が持つ性格と相まって一定の心的距離を持つものとなっている。

一方、本多繁邦は、美少年である清頭に対してその容姿はへ年よりも老けた、目鼻立ちも尋常すぎて、むしろ勿体ぶつてみえる風貌」である。また内面的には、へもの静かな、穏和な、理知的な性格」であり、またへふだんは人に示さない鋭い直観の力を内に蔵してゐた」と形容されている。

さて、このような松枝清頭と本多繁邦であるが、ともかくも親しい友人であった。しかし、先にも述べたように、この二人の友情には一定の心的距離が存在する。なぜなら、素のように距離を持つことが二人が「友情」と考えているものだからである。

例えば、本多が清頭に月修寺の門跡の法話や月修寺の来歴について話して聞かせているときの描写が、本多と清頭の心的距離の置き方を的確に表しているだろう。ところで、

一定の距離を保つことが「友情」であると考えていた二人であるが、その距離の置き方が同質のものであったとは言えない。

清頭が友人と距離を置きたがるのは、その倨傲に由来するものであり、彼の持つ優雅を侵害するものを嫌うからである。一方、本多が清頭と距離をおくのはそれが清頭に対する友情であることを心得ているからである。本多はへとにかく「有用な」人間にならうと決意した青年」であったので、自分の役割を選択しながら、清頭が望む形での友情を示してみせている。本多の清頭に対する心的距離は、あくまで本多自身が意図的に作りだしたものであり、本多の側からは清頭の心情が読み取れる距離である。むしろ、清頭に心情を示すことを強制することはないが、友人として秘密を打ち明ければそれを喜んでいる。また、秘密を打ち明けることは、清頭側から自然に行われなければならないのである。

清頭は幼なじみの聡子との恋愛において、一人の情熱的な青年へと変貌していくが、その清頭についても、本多はその変化の過程を興味深く見ている。このような本多の距離の置き方はまさに観察者であり、清頭に対しては「審美的な見物人」となるのである。

しかし、本多はただ観察するばかりで清頭に対して何の

働きかけもしないというわけではない。聡子との恋愛においてのつびきならぬ状態に陥っていく清頭に対して、本多は様々な支援をしたりしている。これは本多の言うところの『歴史に関はらうとする意志』によるものだとということが考えられる。

また、『春の雪』の最後の場面において、本多は清頭から夢日記を託され、さらに、清頭の「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」という言葉を聞く。この二点によって、最終巻『天人五衰』にいたるまでの本多の、転生の認識者としての役割が決定づけられると考えられるのだが、本多の問題は、認識者としての役割と『歴史に関はらうとする意志』という相反するふたつの点を内包していることだと言えるだろう。

(二) 飯沼勲と本多繁邦

第二巻『奔馬』の主人公は飯沼勲である。清頭が「優雅」に殉じた人間であるとすれば、勲は「純粹」に殉じた人間である。勲の行動の根本には「純粹」があるのだが、それは常に死に通じている。勲にとってその「純粹」は最終的には、自刃することによって全うされるものである。勲は同志の友人たちとともに有力資本家たちの暗殺を計画するが、この計画は国を憂う正義感に由来するものというより、

勲が自らの「純粹」を通すための罪だと言える。勲は国の未来のために死ぬのではなく、「純粹」に死ぬために国の未来という大義名分を必要としたと言えるだろう。

このように勲の外観は清頭とは全く異なる。しかし二人は、それぞれの特性が若さの化身となっている点、その特性が本当に「一回的なもの」という点において共通している。これは転生を認識する者である本多にとって、その対象となる行為を成す者としての同一性を感じさせるものと言えるだろう。

では、このような勲に対して本多の取った行動はどうであらうか。第二巻『奔馬』において、本多は年齢三十八歳、大阪控訴院判事として登場し、決起失敗後は弁護士に転じ、勲の弁護士となる。

勲と出合い、三光の滝の下で勲の左の脇腹に清頭と同じ三つの小さな黒子を見つけた時から、『春の雪』において付された転生の認識者としての役割に翻弄されることになる。本多にとって勲はへ顔つきも肌の色もまるでちがっているのに、その存在の形そのものが正しく清頭その人々なのである。本多は勲との出合いをきっかけに、清頭の転生について考えはじめた。初め、本多が勲を清頭の転生だと見なすことに確信が持てずにいるが、後に、清頭の夢日記の記述が本多の目前で実現されるに当たって、清頭の勲へ

の転生は、本多にとって事実となるのである。

こうして本多は一回目の転生を目の当たりにするわけだが、ここでは本多にとってこの転生はまだ「清頭の生まれ変わり」の域を出ていないように思われる。本多は転生そのものの意味を考え、群がる謎に惑うものの、清頭が蘇ったという点の方に注意を惹かれていと言えらるからだ。本多は自分の人生について「清頭の生は本多の生の意味を代表し、本多が咲かせる筈のない花を成就した」と感じていゝる。故に、勲を通じての清頭へのこだわりは当然のものだろう。本多が実際に勲と深く関わりを持つようになるのは、勲の決起が失敗し、その弁護人となってからのことであるが、それでも本多の行動には清頭へのこだわりが見られる。勲の裁判において本多が救おうとする「彼」は清頭であり勲なのである。

裁判において勲を弁護するために本多が取った方法は、後の『天人五衰』で見られる、安永透への教育に通じるものがあるように思われる。すなわち、勲の持つ「純粹」を汚すという方法である。勲にとっての「純粹」は清頭としての「優雅」である。清頭のときには、彼が勲許を侵して聡子との恋愛を貫くことを止めることが出来なかった。故に、本多はこのことを踏まえているかのように、勲の弁護においては勲の「純粹」を周囲の大人たちが持つ不純さで

もって傷つけ、壊すことで勲を救おうとしている。しかし、本多の努力も虚しく、裁判では極刑を免れるものの、結局は念願の自刃を遂げてしまう。

本多は清頭に続いて勲も救うことが出来ない。結局は、勲という行為を成すものの人生に対して何らかの影響を与えることもなく、その者が「一回的な」人生を生き、夭折するのを見届けることしか出来ていないのである。

(三) ジン・ジャンと本多繁邦

第三卷『暁の寺』は二部構成になっており、主人公はジン・ジャンである。本多とジン・ジャンの関係が詳しく描かれるのは第二部においてであるが、このジン・ジャンと本多の関わり方は、それ以前の清頭や勲と本多の関わり方とは違ったものになっている。

ジン・ジャンはやはり本多によって清頭の転生と認められるのだが、清頭や勲のときのように、ジン・ジャンその人の特性が全面に押し出され、ジン・ジャンの人生に本多が翻弄されるという関係ではない。『暁の寺』における本多は、過去の経験から転生の存在、転生する者の生に対しての自分の無力さを知ってしまったために観察者に徹することになり、ジン・ジャンとの関係は、まきに見る者と見られる者なのである。

本多はジン・ジャンに転生の証拠としての黒子があるかないかを見届けようとするが、その黒子の存在は、物語の最後のジン・ジャンと久松慶子の睦み合いを本多が覗く場面までとは現れない。

本多は、清頭の人生を見ているときには未だ転生そのものを認識していない。勲のときには、彼が清頭の転生であるということを知り、それを認識しては違いないが、その事実は本多を含む一般の理性の法則とは違うものであるため、人目から隠しておかなくてはならないものであり、その事実は本多一人が認識するものだった。ところが、ジン・ジャンの転生については、それを認識すること自体が本多にとって快楽になっているのである。本多は清頭と勲のときには自覚なしに転生の認識者という自覚を果たしていたが、この巻では認識者であることを自覚しており、その役割に自らの快楽を見出し、実行しようとするのである。

この本多が見たいと望むものは「存在の純粋な姿」としてのジン・ジャンである。このため、「覗き」という方法で、ジン・ジャンと自分を隔離し、見ているということを悟られないようにするのである。ジン・ジャンが本多の視線に気づいた時点でその存在の純粋さは損なわれる、と本多は考えるからだ。ところが、本多の見た「存在の純粋な姿」としてのジン・ジャンとはすなわち本多の認識の範

囲外のあるものである。それなのに実際に本多が覗き見るジン・ジャンは、本多の認識の範囲内のジン・ジャンではない。自分の認識の範囲外のものを見ることは不可能なことである。つまり、本多が本当に見たいと思うものと世界を共有するかぎり、本多が見たいものは見ることが出来ないということになる。ならばジン・ジャンと共有する世界から本多がいなくなればよいのだが、それはすなわち本多の死を意味する。

ところが、本多はジン・ジャンの左の脇に三つの黒子を見つけることができるのである。このとき本多は自分の不死を信じるようになる。何故なら三つの黒子は転生の証であり、転生は本多にとって何の干渉も参与もできない不可能のものはずだったからである。

(四) 安永透と本多繁邦

最終巻『天人五衰』の主人公は十六歳の少年安永透である。対する本多繁邦は七十六歳の老人として登場する。安永透は、転生の証拠とされてきた三つの黒子も備えているし、年齢もあっている。しかも、容姿も美しく、一見して今までの主人公たちに続く転生であることの要件を充たしている。しかし、今までの三巻における主人公たちには見られない違和感が存在する。この違和感は、透という人物

が備えている性質によるものである。

透の持つ違和感の原因は三点ほど挙げられる。まず一点目は、その転生が『春の雪』から『暁の寺』に至るまでのあいだに予告されていないことである。二点目は、透自身が多より指摘されるより先に三つの黒子の存在に気づいており、それが「選ばれた者」のしるしだと考えている点である。三点目は、本多自身が自分自身に似すぎているという理由で初めから透に贗物性を感じている点である。しかしながら、本多は透を疑いつつもあえて転生の候補者として養子に迎えるのである。ここにおいて、本多はそれまでとは違い、〈認識者の目で覗き穴から覗いている〉のではなく〈明るい公明正大な窓辺に立つて、自らの意識が命じたとほりに動くさまを、片や心の中で自ら演じ、片や全能の力で指揮して〉いくという積極的な態度にでている。これは、転生という自分にとっては不可能の現象への介入と言えるだろう。

さて、透を養子に迎えた本多は、透に種々の教育を施していく。この教育方針は、透にはへ生の絶頂で時を止めるといふ至福を許さないというものである。この方針によって教育が施されていく過程での透の行動には、過去の三人の主人公たちの行動を彷彿させるものが見受けられる。

清頭と透では、清頭が自分の美しい手を生涯汚すまいと

していたこと、若き故の倨傲を持っていたことが通じる。

また、百子と透の関係は聡子と清頭の恋愛を思い起こさせる。また、汀と透との肉体の快楽を求める関係はジン・ジャンに通じるものがあると言える。さらに、透の本多に対する破壊行動は勲の蔵原暗殺に重なる。しかし、これらの現象において前の三人は無垢であり、それによってまさに生の絶頂で時を止めることに成功したのに対し、透の行動は無垢であるとは言えない。加えて、本多自らが過去の三人と同じ結果にならないようにするため、対応の仕方を教え込んでいくのである。

結果として、透は満二十一歳の誕生日を迎えても死ぬことはない。本多にとってこのことは、透は清頭から続く転生ではないということである。この事実は、本物の転生の若者を捜し出そうという氣力を奪っただけでなく、これまでの生涯を費やして見届けてきた三代に渡る転生をも奪っていった。これは転生の認識者であるという役目を自覚していた本多にとっては自己の存在意義を失うに等しいことだと言える。さらに、『天人五衰』の最後の場面において、月修寺の門跡となっている聡子の言葉によって、本多にとってはすべての始まりである清頭の存在さえ否定されるのである。こうして、本多の見てきたものはすべて否定され、無に返るといふ結果で物語は終わるのである。

二、本多繁邦の認識の物語としての『豊饒の海』

さて一において本多繁邦と各巻の主人公との関わりについて見てみたわけだが、ここではそれを踏まえたいので、本多自身と転生について考えてみたい。

(一) 転生の認識者としての役割

『豊饒の海』が『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語であるというのは、第一巻の後註で明示されている。

『春の雪』から始まる『豊饒の海』全四巻は、各巻の物語のあいだの時間が、転生の仕組みの都合上、十八年ほど空いている。また、四人の主人公はそれぞれ違った特性を持っており、この四人を清頭↓勲↓ジン・ジャン↓透というように通時的にまとめているのが本多繁邦という存在である。

この点により、それぞれの主人公の転生を認識し、同定することで四つの物語をひとつにまとめるという役割が本多に課せられていることが分かる。しかし、逆に言えば転生を認識しているのは本多ただ一人だけであり、本多という認識者がいなければ、『豊饒の海』は単なるオムニバス小説になってしまう。全体がひとつの物語として成り立つには本多の認識が不可欠なのである。しかし、転生を認識し、

それぞれの主人公が前の人物の転生であると同定するのが本多一人であるという仕掛けは、『天人五衰』の最後において、すべての転生は本多の認識の世界の産物でしかなかったのかもしれない、という結果を導くことになるのである。

(二) 本多にとつての転生

では、『天人五衰』の最後において、すべての転生は本多の認識の世界の産物でしかなかったのかもしれないという結果を受けて、そのとおりであると仮定すると、本多にとって転生とは何だったのだろうか。

一で見たように本多と各巻の主人公との関わりを見ていくと、転生の認識者としての本多の行動や主人公に対する態度にはある流れが見受けられる。つまり、「転生者である主人公への漠然とした憧れ」↓「転生が存在することについての認識」↓「認識した転生についての観察、認識者としての自意識を持つ」↓「経験から蓄積された知識の実践、あるいは転生者と自己に対する実験」という流れである。そしてこの流れは、各巻の主人公との関わりに対応する。

『春の雪』において、清頭に対する本多の態度はすでに観察者であることは前にも述べたが、しかし、未だ転生や自己の役割についての認識や自覚といったものはない。そ

れにもかかわらず、清頭すなわち転生する者の生に対する憧れのような感情が見受けられる。これは、後に続く本多と転生者の関わりの中かで、本多の行動の根本にあるものだと考えると考える。なぜなら、本多は物語中において清頭の模倣を試みるからである。例えば、聡子を清頭の待つ別荘へ連れていくための自動車を手から借りる交渉をする場面では、好いた女との密会のために友人から密かに車を借りる青年の役を演じている。これによりへ十九歳の青年が誰しも手に入れたいと望んでいるロマンチックな名声を、清頭のおかげで手に入れる筈なのである。そして本多にとってヘロマンチックな名声を手に入れた青年とは、清頭に重なると言える。また、『春の雪』の最後の場面において、苦しむ清頭の表情にへ何かこの世の極みで、見てはならないものを見た歓喜の表情を読み取り、それに対してへ嫉妬を感じているのである。

『奔馬』では勲を清頭の転生と認めるが、その事実には振り回されている。転生の事実を認めることにおわれている。そして、勲に清頭を重ねつつ行動を起こすが、やはり救えないのである。

『暁の寺』では、第一部において本多は「阿頼耶識」理論の研究や印度のベナレスにおける体験を通じて、転生についての一応の解答を得る。そして、第二部では転生の認

識者という自覚を持って、とにかくひたすら「見る」ことに執着している。ここにおいて本多が望んでいるのは「転生のすべてを見る」ということだと言える。これには本多の認識の範囲外のことも含まれるのだが、「見た、分かった」認識した」ということなので、認識の範囲外のことを知るのとは不可能である。しかし、ジン・ジャンに黒子を見つけることが出来たことにより、本多にとって不可能の現象であるはずの転生が、本多に自信の不死を信じさせる、つまり不可能が可能になるものと信じさせるにいたるのである。

そして『天人五衰』における本多は、観察者というよりむしろ所謂マッドサイエンティストのようであると言える。本多の安永透への教育は、まさに実験だと言えるだろう。透は、転生者の外形と極めて本多自身に似た内面を備えている。このことから本多は透を贗物すなわち転生者ではないと疑うが、養子として引き取り教育を施す。ここに本多のジレンマが読み取れる。本多はここまで、その経験によって自分が転生者には決してなれないことを自覚している。それなのに透は、自分と極めて似た内面を持っているが、かつ転生者の資格を備える者なのである。本多が施した教育は、転生者として死なないための教育である。透が真に清頭から続く転生であるのか、自分と極めて似た内

面を持ちながら転生者になりうるのか、ということは、本多にとってとは不可能の現象である「転生」への挑戦であると言えるだろう。

以上のように考えると、本多にとって転生とは、決して自分が立ち入ることの出来ない理想の世界であるだろう。本多は清頭、勲、ジン・ジャンの三人と係わるなかで、この三人がそれぞれに持っている特性に魅力を感じている。つまり、清頭が「優雅」、勲が「純粹」、ジン・ジャンが「肉」を象徴するものとして、三人がそれぞれ本多の理想像の具現であると考えられるのである。

(三) 本多が転生者になりえる可能性

さて、このように転生の行為を成す生に惹かれた本多であるが、本多と転生の行為者である清頭、勲、ジン・ジャンとの関係において、本多が清頭たち転生者の側に移行しうるかどうかを考えると、その可能性はないと言える。

『春の雪』において、本多はへその表面にあらはれるところでは、官能的なものは片鱗もなかったけれど、時あつてずつと奥処で、火の燃えさかつて薪の鳴つてゐる音が聞こえるやうな感じを人に与へた。青年であると形容されている。また、へ熱い闇にいつも惹かれがちな心性をも、捨てることはできなかった。ともある。清頭と本多ではへ同

じ根から出ているとも評されており、転生者と本多とは、行為者と観察者として全く異質なものであるとはいひ切れない。それなのに、本多が観察者から行為者へ移行することがありえないという理由は、本多は主人公たちのように美しい外見を備えておらず、かつ、そのことを知っているから、ということである。

『豊饒の海』において、転生者としての要件は、美しい容姿を備えていること、自分自身の行動について無垢であること、である。よって、自分のことについて「知っている」本多は転生者にはなりえないのである。

さらに、各巻の主人公たちは三人とも「一回的」な生を送っている。その生が象徴するものは違うとはいへ、本質は同じであると言える。何度転生を繰り返しても、その時々々の生の本質は変わっていない。とすれば、本多の生は転生を認識する者の生である。大きな枠で見れば、本多もまた誰かの転生者であると考えられ、その場合においても、本多の転生の主体が持つ運命は、認識者としての運命であると考えられる。すると、やはり本多は何度転生しても、転生の認識者であると言えるだろう。

おわりに

以上のように、本多繁邦という人物について考察してみ

た。

この作品には清頭、勲、ジン・ジャンといったへ生の絶頂で時を止めることが出来る人間と、そうでない人間が登場する。本多は「時を止めることができなかった」人間である。自分の宿命に納得はしているものの、生の絶頂で時を止めるという生に対する憧憬は強い。自分には不可能であるということを知っているからこそ、よけいにその憧れは強いのである。

本多は清頭から始まる転生にとらわれつづけ、転生の認識者としての生に翻弄されたように思われる。『豊饒の海』というタイトルは「月の海の一つのラテン名」の邦訳である^(註四)。そうだが、月面の荒涼とした様子は、「豊饒」という名前にも係わらず実際には水も空気もない不毛の海であり、作品の最後とよく重なるのである。

註

註一：認識者である本多繁邦に対して、認識の対象となる登場人物のこと。

野口武彦「輪廻転生のパラドクス―『豊饒の海』における行為者と認識者をめぐって―」(『国文学』第三十五卷四号、平成二年、学燈社)における記述に倣った。

註二：三島由紀夫全集第十八巻(新潮社、一九七三年)四一三頁参照

註三：三島由紀夫全集第十八巻(新潮社、一九七三年)四三九頁参照

註四：『春の雪』後註より

○原典

・『春の雪』――『豊饒の海』第一巻(三島由紀夫全集第十八巻、新潮社、一九七三年)

・『奔馬』――『豊饒の海』第二巻(三島由紀夫全集第十八巻、新潮社、一九七三年)

・『暁の寺』――『豊饒の海』第三巻(三島由紀夫全集第十九巻、新潮社、一九七三年)

・『天人五衰』――『豊饒の海』第四巻(三島由紀夫全集第十九巻、新潮社、一九七三年)

○参考文献

□単行本

・『『豊饒の海』論』(渡辺広士、審美社、一九七二年)

・『三島由紀夫『豊饒の海』論』(對馬勝淑、海風社、一九八八年)

・『三好行雄著作集第四巻 近現代の作家たち』(三好行雄、筑摩書房、一九九三年)

・『鑑賞日本現代文学』③ 三島由紀夫(田中美代子、

角川書店、一九八〇年)

□雑誌掲載論文

- ・『『豊饒の海』における「転生」——妄想の子供たち——』

(有元伸子、「日本文学」四十四号、一九九五年)

- ・「輪廻転生のパラドクス——『豊饒の海』における行為者と認識者をめぐって——」

(野口武彦、「国文学」第三十五卷四号、平成二年、学燈社)

- ・『『豊饒の海』——物語の構造』

(若森栄樹、「国文学」第三十八卷五号、一九九三年)

- ・「繰り返される欲望の形——『豊饒の海』読解の試み——」

(加藤裕子、「南山国文論集」第十八号、一九九五年)

□その他

- ・「春の雪」について (三島由紀夫全集第三十四卷、新潮社、一九七六年)

- ・「豊饒の海」について (三島由紀夫全集第三十四卷二十四頁、新潮社、一九七六年)

- ・「豊饒の海」について (三島由紀夫全集第三十四卷

五十一頁、新潮社、一九七六年)

- ・文庫版『春の雪』解説(佐伯彰一、新潮文庫、一九七七年)

- ・文庫版『奔馬』解説(村松剛、新潮文庫、一九七七年)

- ・文庫版『暁の寺』解説(森川達也、新潮文庫、一九七七年)

- ・文庫版『天人五衰』解説(田中美代子、新潮文庫、一九七七年)

- ・『浜松中納言物語』(日本古典文学大系77、岩波書店、一九六四年)